フィロンにおけるパイデイア*

山　田　耕　太

1．始めに

ギリシア時代やヘレニズム時代の社会において、「パイデイア」はキー・コンセプトであり、それは「教育」を意味するばかりでなく、「教養」や「文化」をも意味する広い概念であった。[1] ギリシア・ローマ時代に「パイデイア」の概念が形成される歴史の中で、[2] アレクサンドリアのユダヤ人哲学者フィロン（紀元前20年頃～紀元50年頃）の「パイデイア」は、どのように位置づけられるのだろうか。フィロンはユダヤ教の聖書をギリシア哲学により解釈した思想家として知られているが、ヘレニズムとヘブライズムの出会いの中で、フィロンの「パイデイア」の概念は、どのように構成されていたのだろうか。また、それは神学史や思想史の中で、どのような意義をもっていたのであろうか。

2．研究史瞥見

フィロンの「パイデイア」に関する研究は、後にLoeb Classical Libraryのフィロン全集10巻の訳者となったF. H. Colsonによって始められた。[3] そこでは、「アルテス・リベラーレス」である「エンキュクリオス・パイデイア」が「文法」「修辞学」「幾何学」（「天文学」は「幾何学」の一部）「音楽」で構成され、『教育としての結婚について』がその主たる資料であり、フィロンにおける「エンキュクリオス・パイデイア」の象徴的な意味を指摘した。L. M. de Rijkは「エンキュクリオス・パイデイア」の形成史の終わりにフィロンにおける「エンキュクリオス・パイデイア」の用法とフィロンの資料について探求した。[4] Albert Henrichsは、19世紀半ばのF. J. Clemensの指摘を受けて、フィロンにおける「エンキュクリオス・パイデイア」と「哲学」の関係を明確にして、「哲学は神学の侍女」（Philosophia theologiae ancilla）という中世の格言が、フィロンに遡ることを明らかにした。[5] さらにW. H. Wagnerは、フィロンにおける「パイデイア」概念を取り上げて、ヘブライズムとヘレニズムの対立ではなく、アレクサンドリアにおけるユダヤ教とギリシア古典文化との相互関係を明

らかにした。[6]

これらいくつかの先行的研究を受けて、フィロンにおける教育という未開拓の分野を徹底的に議論したのは、Alan Mendelsonであった。彼は「エンキュクリオス・パイデイア」の構成（「文法」「修辞学」「弁証学」「幾何学」「代数」「音楽」「天文学」）を吟味し、その意味を歴史的・哲学的・教育学的側面でフィロンの思想的文脈の中に位置づけ、とりわけフィロンが分類した三種類の人間（「神の人間」「天の人間」「地の人間」）における「パイデイア」の意味を考察した。[7]

本稿では、これらの先行的研究を整理しつつ、重要な概念についてテキストにあたって[8]フィロンの「パイデイア」についての先の問いに答えていきたい。

3．フィロンにおける「パイデイア」概念の構成

フィロンにおいて「パイデイア」（paideia）という概念は、「無教育」を意味する「アパイデウシア」（apaideusia）と対立する概念であり、「前（段階の）教育」を意味する「プロパイデウマ」（propaideuma）の後段階として位置づけられている。[9] すなわち、「アパイデウシア」「プロパイデウマ」「パイデイア」という三段階の概念で構成されている。

「アパイデウシア」は「無学」（amathia）[10]や「無知」（agnoia）[11]と同義であり、それは「愚かさ」（aphrosynê）[12]と「誤り」（hamartêma）[13]の原因であり、忘れ去られ、それに対して「パイデイア」は「知識」（epistêmê）と同義であり、それは記憶される。[14]「パイデイア」は「健康」と「救い」を与え、「アパイデウシア」は「病」と「破滅」の原因である。[15]「パイデイア」は理性による魂の「素面な」（nêphalios）[16]状態に、「アパイデウシア」は理性のない魂の「酩酊」（methê）[17]の状態に象徴され、[18]「パイデイア」は理性的な「正しい基準」（kanôn orthês）なのである。[19]

「プロパイデウマ（前教育）」は、「エンキュクリオス・パイデイア」（egkyklios paideia）とも呼ばれたが、[20] それは「完全な徳」（teleioi aretai）と「知恵」（sophia）を目的とした[21]「哲学」のための前段階の準備教育を指す言葉であった。

このような「アパイデウシア」・「プロパイデウマ」・「パイデイア」という三段階の教育を表す言葉は、それぞれ「自然」（physis）・「学習」（mathêsis）・「訓練」（askêsis）という言葉に対応し、[22] 神に背を向けた自然のままの「悪者」を意味する「初学者」（phaulos）、学びつつ

進歩する「学習者」（ho prokoptôn）、哲学の訓練を受けて「善者」である徳のある完全な「知恵者」（sophos）に対応していた。[23]

4．フィロンにおける「エンキュクリオス・パイデイア」

今日の「リベラル・アーツ教育」の淵源は、ギリシア・ローマ時代の「エンキュクリオス・パイデイア」にある。「エンキュクリオス」という形容詞は、「円環的」という意味であるが、諸科目が円をなすように互いに関連し合う教育課程であるのでそう呼ばれた。ギリシア語の「パイデイア」（paideia）をラテン語に「フマニタース」（humanitas）と訳し、[24]「エンキュクリオス・パイデイア」（egkyklios paideia）を「アルテス・リベラーレス」（artes liberales）と訳したのはキケロである。[25]

フィロンは「エンキュクリオス・パイデイア」[26] という表現を用いるばかりでなく、「パイデイア」は「ムーシケー」から発展してきたので[27]「エンキュクリオス・ムーシケー」（egkyklios mousikê）[28] とも「エンキュクリオス・メレテー（円環的調和）」（egkyklios meletê）[29] とも呼び、また「パイデイア」の目指す目的が「観想」的な「知識」であるので「ハイ・エンキュクリアイ・エピステーマイ（円環的知識）」（hai egkykliai epistômai）[30]「ハイ・エンキュクリアイ・テオーリアイ（円環的観想）」（hai egkykliai theôriai）とも呼び、[31] あるいは哲学教育への前段階である準備教育であるので「タ・エンキュクリア・マテーマタ」（egkyklia mathêmata）とも[32]「エンキュクリア・プロパイデウマタ」（egkyklia propaideumata）[33] とも表現した。あるいは単に「タ・エンキュクリア」（ta egkyklia）[34] とも「プロパイデウマタ」（propaideumata）[35] とも呼び、「メセー・パイデイア（中間の教育）」（mesê paideia）[36]「メサイ・エピステーマイ（中間の知識）」（mesai epistêmai）[37] という表現も用いた。

紀元前１世紀頃には既に「文法」「修辞学」「弁証学」「代数」「幾何学」「音楽」「天文学」という「自由7科」が形成されていたと考えられるが、[38] フィロンにもそれが反映されている。[39] 例えば、『モーセの生涯について』で、モーセは「代数」「幾何学」「音楽」をエジプト人から学び、「他のエンキュクリオス・パイデイア」についてギリシア人から学び、近隣のアッシリアの「文法」やカルデヤの「天文学」やエジプトの「数学」[40] を学んだとされる。[41]

「文法」では、初等の段階では読み書きなどの文法を学ぶが、上級の段階では詩や劇などの文学や歴史書を通して歴史を学ぶ。[42] すなわち、半神

や英雄や歴史的人物の過去の出来事から、[43] 多くの知識や知性を学び、空虚な空論を軽蔑することを学ぶ。[44]

「修辞学」では、「構想」「配列」「修辞」「記憶」「実演」について学ぶ。[45] それは事実について観察する精神を鋭くし、表現することに訓練を重ねて、言葉と思考を支配する方法を身につけて、[46] 流暢な言葉で、時には感情を高めたり、緩めたりして快感を与える。[47]

「弁証学」は、「修辞学」の双子の姉妹とも考えられているが、[48] そこでは真の議論と偽りの議論を区別して、偽りの思考を排除することを学ぶ。[49]

「代数」と「幾何学」では、計算や比率に関して正確さを養い、[50] 特に後者は対称や比率の美しさを学び、[51] 平等についての感覚や正しい理論についての情熱を育成する。[52]

「音楽」では、「文法」とも深く関連するリズム・メロディー・ハーモニーなどを学び、不一致を取り除いて一致を学ぶ。[53] 音楽理論は「代数」や「天文学」とも関連する。

「天文学」はカルデヤの学問として著名で、天球図が描かれていたが、[54] 幾何学と並んで理論的な学問として挙げられている。[55] そこでは天体の動きを観察するばかりでなく、世界で起こる出来事や運不運や善し悪しも天体の動きに左右されると考えられていた。[56]

「エンキュクリオス・パイデイア」は、感覚的世界を対象にした単なる知識（technê）でばなく、具体的な対象の理性的な知識であり、例えば「天文学」では天体を、「音楽」では音符を、「幾何学」では線を対象にする。それに対して「哲学」では、目に見えるものであれ見えないものであれ、あらゆる形の存在するもの全てを対象にした感覚的世界を越えた知識である。[57] こうして、「エンキュクリオス・パイデイア」は、「哲学」への準備教育となる。

5．「エンキュクリオス・パイデイア」の象徴的な意味

「エンキュクリオス・パイデイア」は、いくつかの「隠喩」（metaphora）によって描かれる。第一に、「学習者」（prokopos）が「幼子」（nepios）であり、「知恵者」（sophos）が「成人」（teleios）の隠喩として語られる中で、「エンキュクリオス・パイデイア」が「幼子」の魂に与える「乳」（gala）で語られ、[58] あるいは「乳」に代わる「柔らかい食べ物」で語られ、「哲学」は「より堅い食べ物」である「肉」の比喩で語られる。[59]

第二に、農夫が木を植えるように、子供の魂に「若木」（moscheuma）を植える比喩で描かれる。しかし、愚かさと放縦の木、不正と臆病の木、

快楽と欲望の木、怒りと憤怒と激情の木となるものは、根こそぎ切り倒される。思春期の青年は「哲学」によって思慮深さと勇気と節制と正義という徳のある木に育つ。[60]

第三に、ハガルが「泉」のほとりで主の御使いに出会って祝福され（創世記16：7）、エリムのなつめやしの木々が「泉」の脇で茂っていたように（出エジプト記15：27）、それは「泉」（pegê）に喩えられる。なつめやしの木が泉から水を吸い上げて育つように、魂は真っ直ぐで滋養豊かな理知的な諸学（logoi）を吸い上げて育つ。[61]

さらに「エンキュクリオス・パイデイア」は、いくつかの「寓喩」（allêgoria）によって語られる。第一に、天地創造のアレゴリー的解釈で、世界は神の「ロゴス」によって創造され、人間も「ロゴス」によって「神の像」（fasma）に創造されたが、人間の「魂」は暗闇の中で「光」である「パイデイア」を追求し、「エンキュクリオス・パイデイア」の段階を経て「パイデイア」を追求する。[62] 天が示した「パイデイア」である「哲学」を人間の「精神」（nous）が受ける。[63] そこでは、「エンキュクリオス・パイデイア」と「パイデイア」は、人間の「魂」を育てる母に喩えられ、真っ直ぐな「正しい理性」（orthos logos）は魂を育てる父に喩えられる。[64] あるいは、逆に人間の「精神」（nous）が「哲学」の父に喩えられる。[65]

第二に、アブラハムとサラ・ハガルの物語のアレゴリー的解釈で、「ハガル」と「エジプト」は「エンキュクリオス・パイデイア」を象徴し、「サラ」は「哲学」を、アブラハムは「魂」を象徴する。そこで、サラの「侍女」（therapainis）であるハガルは、「知恵の侍女」「徳の侍女」という比喩で語られる。[66] また、ラケルとレアの姉妹は、ハガルとサラと同様に、それぞれ「エンキュクリオス・パイデイア」と「パイデイア」すなわち「哲学」のアレゴリーとして語られる。[67] これはストア学派で「エンキュクリオス・パイデイア」を「侍女」（therapainai）と呼び、「哲学」を「女主人」（despoina）「女王」（basilissa）と呼んだ用法に基づいている。[68]

フィロンによれば、人間は「アパイデウシア」「プロパイデウマ」「パイデイア」とそれらに関連する「初学者」「学習者」「知恵者」という三段階の「パイデイア」に対応して、生まれながらの「地の人間」（hoi ges）「天の人間」（hoi ouranou）「神の人間」（hoi theou）という三種類の人間に分けられる。[69] すなわち、「地の人間」は肉体的な快楽に従って生きる人であり、その代表はニムロドである。[70]「天の人間」は天の世界

に通じる「精神」（nous）において「エンキュクリオス・パイデイア」や「哲学」を学ぶことを好む人であり、その中で天上のものを求めて進歩して「知恵者」となった代表はアブラハムである。[71]「神の人間」はこの世に属し現実の世界の市民となることを拒む祭司や預言者などであり、その代表は「哲学」の教えを受けるばかりでなく神の啓示を受けた聖なる人モーセである。[72]

こうして、感覚の世界に関する「エンキュクリオス・パイデイア」から永遠の世界に関する「パイデイア」すなわち「哲学」の道への歩みに導かれる。

6．「パイデイア」における哲学

フィロンにとって、「哲学」とは「完全な学問」であり、[73] 真実で真正な「哲学」へ導く王道は「律法」であり、それは唯一の王である神に導く道である。[74] また、それは「聖なる哲学」[75]「先祖の哲学」[76]「ユダヤの哲学」[77] とも呼ばれ、しかも「律法」はアレゴリー的解釈を施されたものであった。[78]

「律法」をアレゴリー的解釈する背景には、ギリシア哲学の様々な影響が見られる。フィロンは、アリストテレス以降のアレクサンドリアのヘレニズム哲学の影響下にあり、アリストテレスの影響も受けているが、エピクロス学派には反対であり、基本的にはストア学派の影響下にあり、中期プラトン学派の影響も同時に受け、ストア学派の影響と中期プラトン学派の影響の微妙なバランスの下にある。[79]

例えば、その例を幾つか挙げると、第一に、4，6，7，10という完全数への偏重は、[80] ピュタゴラス学派の影響である。第二に、より重要なのはプラトン学派の影響である。『創造について』はプラトンの『ティーマイオス』の影響で書かれ、知識は視覚によって形成されるという「認識論」[81] も、「理性」（logos）「意欲」（thumos）「欲望」（epithumia）による「魂の三分説」[82] も、魂の「想起説」[83] も、「イデア論」[84] も、「霊魂不滅説」[85] も、プラトンの影響である。第三に、「四原因説」[86] も、徳の「中庸説」[87] もアリストテレスの影響である。先行した哲学者の諸教説を越えて新たな議論を展開するアリストテレスは尊敬の念で言及される。[88] 第四に、ストア学派の影響は随所に見られるが、その代表的な例を挙げると、「論理学（正しくは認識論を含む「言葉の学」）」「自然学」「倫理学」という哲学の三分野であり、[89]「倫理的に美しいことのみが善である」[90]「知恵者のみが支配者で王である」[91] という思想などである。また、フィロン

はストア哲学の「論理学」「自然学」「倫理学」の中で最高の学である「倫理学」に、モーセの律法解釈による「神学」を含め、これを「哲学」と呼んだのであった。

しかし、フィロンにとって真の支配者で知恵者である王は、人間ではなく神であり、神に到る真の王道である神の言葉に関する「真の哲学」とは異なる「偽りの哲学」がある。[92] すなわち、「真理」（alêtheia）であり「知恵」（sophia）である「哲学」と「偽り」（pseudos）であり「詭弁」（sophisteia）である「哲学」があり、前者はイサクに後者はイシュマエルに象徴され、前者は美しく後者は醜い。[93] すなわち、フィロンにとって二つの修辞学があり、一つは「パイデイア」である「哲学」に繋がる真の修辞学であり、他方は「エンキュクリオス・パイデイア」に止まり、真偽を論じる「弁証学」を欠いた偽りの修辞学、すなわち「ソフィスト」の「詭弁」である。[94] これら「エンキュクリオス・パイデイア」に固執して止まることと「詭弁」に陥ることが、「パイデイア」の道の途上での二つの過ちとされる。

7．結びに

フィロンは、サラを「パイデイア」すなわち聖なる神の言葉に関する「真の哲学」の象徴とし、ハガルを世俗の学問である「エンキュクリオス・パイデイア」の象徴として、「侍女」という隠喩を用いて、「哲学」に代表される世俗の学である諸学が聖なる学である神学に仕える仕方でヘレニズムとヘブライズムを統合するパイデイア概念を形成しした。こうして、フィロンは「神学」に従属する「哲学」、「信仰」従属する「理性」という中世思想の核心となる思想的土台を初めて形成したのであった。フィロンのパイデイア概念はアレクサンドリアのクレメンスやオリゲネスを経て東方キリスト教世界に広まり、アンブロシウスやアウグスティヌスを経て西方キリスト教世界に広まった。こうして、それは「哲学は神学の侍女である」という中世の格言が生じるほどにまで、キリスト教神学の枠組みの源となったのであった。それは神学史に止まらず、啓蒙時代のスピノザやアダム・スミスらのユダヤ思想史やヨーロッパ思想史、さらにイスラーム思想史にまでも影響を与えたのである。[95]

＊　本稿は、2008年３月14日に聖学院大学で開催された日本基督教学会関東支部会で発表した原稿の一部を書き改めたものであり、2007-2010年度科学研究費基盤研究C「新約聖書におけるヘレニズム・ユダヤ人キリスト教書簡文学の修辞学的

研究」による研究成果の一部である。

1 W. Jaeger, *Paideia: The Ideals of Greek Culture*, vols. 1-3, Oxford: Blackwell, 1947/ New York: Oxford University Press, 1969 (German Org. 1933-43); H. I. Marrou, *A History of Education in Antiquity*, London: Sheed & Ward, 1956 / Madison: The University of Wisconsin Press, 1982 (French Org. 1948), 95-101 =『古代教育文化史』岩波書店、1985年。

2 山田耕太「ギリシア・ローマ時代のパイデイアと修辞学の教育」『敬和学園大学研究紀要』第17号（2008年）、所収、参照。

3 F. H. Colson, "Philo on Education," *Journal of Theological Studies* 18 (1916-17), 151-162; idem, "General Introduction," *Philo* (LCL), vol. 1, ix-xxii, esp.xvi-xxii.

4 L. M. de Rijk, "Egkyklios paideia: A Study of its Original Meaning," *Vivalium* 3 (1965), 24-93, esp. 73-85.

5 Albert Henrichs, "Philosophy, the Handmaid of Theology," *Greek, Roman & Byzantine Studies* 9 (1968), 437-450.

6 W. H. Wagner, "Philo and Paideia," *Cithara* 10 (1971), 53-64.

7 Alan Mendelson, *Secular Education in Philo of Alexandria* (Monographs of the Hebrew Union College No.7), Cincinnati: Hebrew Union College Press, 1982.

8 F. H. Colson (& G. H. Whitaker, vols.1-5), *Philo,* Loeb Classical Library vols.1-10, Cambridge: Harvard University Press/London: Heinemann, 1927-1941, 1962. Cf. P. Borgen et al, *The Philo Index: A Complete Greek Word Index to the Writings of Philo of Alexandria*, Leiden: Brill, 2000.

9 Cf. W. H. Wagner, "Philo and Paideia," *Cithara* 10 (1971), 53-64.

10 *Leg* 3:20, 33, 193; *Ebr* 137; *Congr* 8.

11 *Leg* 3:121. Cf. anepistêmosynê, *Somn* 1:225.

12 *Ebr* 125.

13 *Ebr* 11, 12.

14 *Ebr* 137.

15 *Ebr* 141.

16 *Sob* 2, 4 etc.

17 *Ebr* 1 etc, ローマ13:13、参照。

18 *Ebr* 153-154.

19 *Fig* 152.

20 *Leg* 3:167; *Sacr* 38; *Congr* 35; *Fig* 183.

21 *Sacr* 43.

22 *Somn* 167, 169; *Abr* 54; *Ios* 1; *Praem* 65.

23 *Leg* 3:1-10, 140-144. Cf. *Fug* 202, 213; *Somn* 2:234-237.「自然」「学習」「訓練」のみならず、「進歩」（prokopê）という概念、「愚かさ」（aphrosynê）から「知恵」（sophia）へ、「悪」（kakia）から「徳」（aretê）へ、「不幸」（kakodaimonia）から「幸福」（eudaimonia）へという概念、さらにそれらの「中間」（mesê）という概念ならびに三段階の概念は、ストア学派の哲学の影響である。

24 Marrou, *A History of Education*, 99.

25 Cicero, *De Inv.* 1.35, cf. *De Or.* 1.17, 72, 3.127; Seneca, *Ep.* 88.2.
26 *Leg* 3:244; *Cher* 6; *Agr* 18; *Congr* 72, 121; *Somn* 1: 240; *Mos* 1: 23; *Spec* 1: 335-336.
27 山田耕太「ギリシア・ローマ時代のパイデイアと修辞学の教育」、参照。
28 E.g. *Agr* 9, 18; *Ebr* 49; *Migr* 72; Her 274; *Congr* 9, 23; *Mut* 229.
29 *Cher* 104-105.
30 *Congr* 14. Cf. “he tôn egkykliôn epistemê” (Cher 105).
31 *Congr* 20.
32 *Leg* 244.
33 *Cher* 102; *Sacr* 43; *Post* 137; *Congr* 35; *Fug* 183, 213.
34 *Leg* 3: 167, *Cher* 3, 105, *Sacr* 44; *Gig* 60; *Ebr* 49; *Sobr* 9; *Congr* 10, 19; Prob 160; *Legat* 166, 168.
35 *Leg* 3:167, *Cher* 8, 10; *Sacr* 38, 43; *Agr* 9; *Congr* 9, 24; *Fig* 183, 213.
36 *Cher* 3, 6; *Congr* 2, 14, 20-24, 145; *Fug* 183-188; *Mut* 228, 255. 註23、参照。
37 *Congr* 127, 128.
38 山田耕太「ギリシア・ローマ時代におけるパイデイアと修辞学の教育」、参照。
39 『教育としての結婚について』では、「文法」「幾何学」「天文学」「修辞学」「音楽」「他の全ての理知的理論」（*Congr* 11）、「文法」「音楽」「修辞学」「弁証学」（*Congr* 15-18）、『ケルビムについて』では、文学や歴史を含めた「文法」「幾何学」幾何学に含まれた「音楽」「修辞学」（*Cher* 105）、『農事について』では、「修辞学」「弁証学」「幾何学」（*Agr* 13）、「文法」「幾何学」「修辞学」「全てのエンキュクリア・パイデイア（円環的教育課程）のムーシケー」（*Agr* 18）、『夢について』では、「文法」「代数」「幾何学」「音楽」「修辞学」（*Som* 1:205）が挙げられている。
40 “mathêmatikê”（数学）は、ピュタゴラス学派やその影響下にあるプラトン学派以来、通例では「代数」「幾何学」「天文学」「音楽」という理系の諸学問の総称を指す。Colson（*Philo,* vol.6, 288-289）は、「数学」（mathêmatikê）を「占星術」と訳すが、それは「天文学」が「幾何学」の一部で学問として成立していなかったという見解による（註55、参照）。そこで「天文学」（astronomia）をある場合には「占星術」（astrology）と訳す（*Her* 98, *Congr* 49, *Som* 1:161, *Abr* 69, 77）。
41 *Mos* 1:23-24.
42 *Som* 1:205, *Congr* 74.
43 *Cher* 105.
44 *Congr* 15.「フィロンの見解では、徳の肯定的で真似るべき模範の主な源は聖書である。」（A. Mendelson, *Secular Education* , 6）
45 *Som* 1:205.
46 *Congr* 17.
47 *Cher* 105.
48 Aristotle, *Rhet* 1.1.1, 1.2.7.
49 *Congr* 18.
50 *Som* 1:205.
51 *Congr* 75.
52 *Congr* 16.

53 *Congr* 16, 78, *Som* 1:205, *Agr* 137.
54 *Migr* 178, *Her* 97-99*Congr* 49, *Mos* 1:23-24, *Somn* 1:161, *Abr* 69, 77.
55 *Leg* 1:27. Mendelsonは、「エンキュクリオス・パイデイア」の諸学問が列挙されている箇所で「天文学」が一箇所（*Congr* 11）でしか言及されていない理由として、（1）天文学が幾何学や音楽の一部として位置づけられ独立した学問として成立していなかったという立場（Colson, Drummond）、（2）天文学が「エンキュクリオス・パイデイア」を一歩越えて哲学の一部として位置づけられていたという立場（Wolfson, Goodenough）、（3）「天文学」と「占星術」の用語の区別が確立していなかったという立場（Marrou）などを挙げるが（*Secular Education*, 17-24）、「天文学」が学問として成立して、他の箇所で言及されていることを見落としている。
56 *Her* 97, *Congr* 49.
57 *Congr* 144.
58 Agr 9, あるいは「ソフィスト」が「幼子」で、「知恵者」が「成人」として語られる（*Sob* 9）。「幼子」（Ⅰコリント3:1, 13: 11, ガラテヤ4:1, 3, エフェソ4: 14, Ⅰテサロニケ2:7, ヘブライ5: 13）、「知者」（Ⅰコリント2:6, 13:10, 14:20, エフェソ4:13, フィリピ3:15, コロサイ1:28, 4:12, ヘブライ5: 14, 9:11）、「乳」（Ⅰコリント3:2, ヘブライ12:13, Ⅰペトロ2:2）参照。
59 *Prob* 160.
60 *Agr* 17-18.
61 *Fug* 183-188.
62 *Opif* 16-17; *Leg* 3:167.
63 *Spec* 3:185.
64 *Ebr* 33.
65 *Spec* 1:336.
66 *Congr* 9, 11, 12, 22, 73.
67 *Ebr* 48-49.
68 Diogenes Laertius, 2. 79-80.
69 *Gig* 60-61.「第一の人間（最初のアダム）は大地から（ek gês）、第二の人間（最後のアダム）は天から（ex ouranou）」（Ⅰコリント15:47-49）、比較。
70 *Gig* 65-66.
71 *Cher* 4; *Gig* 62-64.
72 *Gig* 67; *Opif* 8; *Mos* 1:48
73 *Ebr* 51.
74 *Post* 101-102.
75 *Cont* 26
76 *Somn* 2:127; *Mos* 2: 216; *Cont* 28; *Legt* 156.「最も高貴で最も神聖な哲学の観想的な部分」（*Cont* 67）、参照。
77 *Legt* 245.
78 *Opif* 157; *Leg* 2:5, etc.
79 Cf. F. Alesse (ed.), *Philo of Alexandria and Post-Aristotelian Philosophy*, Leiden: Brill, 2008.
80 *Opif* 13-14, 101-102; Congr 81-88.
81 *Opif* 54-55; *Abr* 164; *Spec* 1:337-343(339), 3:185-194(185). Cf. Plato,

Timaeus, 47A.

82 *Leg* 1:70-73, 3:115; *Spec* 4:92.Cf. Plato, *Timaeus*, 69E-F.

83 *Opif* 15-25; *Leg* 3:91-93; *Mig* 2205-206.

84 *Opif* 15-25, etc.

85 *Opif* 119, etc.

86 *Cher* 125.

87 E.g. *Deus* 162.

88 *Aet* 10-17.

89 *Leg* 1:57; *Agr* 14; *Spec* 1:336.

90 *Post* 133.

91 *Mig* 197; *Mut* 152-153; *Somn* 2: 244.

92 *Post* 101-102

93 *Cher* 9; *Sob* 9; *Prob* 4.

94 *Congr* 18.

95 H. A. Wolfson, *Philo: Foundations of Religious Philosophy in Judaism, Christianity and Islam*, Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1982 (Orig., 1947), vol. 1, ch.2, "Handmaid of Scripture," 87-163, esp., 143-163; vol.2, ch.14, "What is New in Philo?", 439-460.